

つくさか地域食育支援プロジェクト

附属坂戸高等学校農場部 黒岩健一（実習助手）・嶋田昌夫（教諭）・渋谷陽介（教諭）・白石充（実習助手）

1.事業の概要

本プロジェクトは、筑波大学附属坂戸高等学校における農業教育の実績とノウハウを原資として、近隣の小中学校における食育活動を支援しようとするものである。

近年、小中学校において食育の重要性が認識され、多くの学校で食育の基本となる農業体験学習が取り入れられている。しかし、専門性のある教員が居ない小中学校では、農業体験学習の成果を十分に得られない状況にある。そこで本プロジェクトでは、小中学校における様々な食育活動を支援することを目的に、坂戸

市教育委員会を通じて、近隣の小中学校への農業体験学習の指導や、本校をフィールドとした農業体験授業の実施、また給食食材の提供や職員研修などを行っている。また、坂戸市健康政策課、坂戸市福祉協議会などとも連携し、本プロジェクト担当者が坂戸市食育推進協議会へ委員として参加して、農場を有する高等学校の立場から、地域全体の食育活動の計画作りにも参画している。

※「つくさか地域食育支援プロジェクト」の「つくさか」とは、本校の愛称であり、校内のみならず、地域からも親しみを込めて「つくさか」と呼ばれている。

2. 事業成果の概要

(1) 小学校2年生総合学習における野菜栽培学習

2011年4月～12月、坂戸市立南小学校内の菜園で実施。1学期はトウモロコシとナス・ピーマン・トマトの栽培を本校教員が指導した。2学期にはダイコン栽培の指導を、本校3年次生の農業科目と連携させながら実施した。



南小学校では、この取り組みを含めた食育活動が評価されて、平成23年度「埼玉県食の安心大賞」を受賞し、埼玉県より表彰された。

参考URL：<http://www.pref.saitama.lg.jp/uploaded/attachment/478870.pdf>

(2) 小学校2年生の農場探索学習

2011年6月7日、本校農場において実施、本校教員と生徒が農場をフィールドとした農業動植物観察学習を指導した。



(3) 小学校3年生の地域発見学習

2011年6月24日、本校農場において実施、地域に残る農的環境を知るための学習を、本校教員が指導した。

(4) 小学校教員への農業体験研修

2011年7月25日、本校農場において実施、坂戸市立南小学校の職員研修として、夏野菜の栽培管理・収穫作業を本校教員が指導した。



(5) 夏休み食育体験教室の開催

2011年8月、坂戸市社会福祉協議会との共催で、食育体験教室を開催。小学生18名が参加し、本校教員の指導で、家畜の管理と食品加工（手打ちパスタ作り）を実施した。

(6) 学校産野菜・鶏卵・豚肉の給食食材の提供

2011年9月より、坂戸市立南小学校、坂戸市立坂戸小学校へ適宜提供。栄養教諭との連携により、地元野菜を使った給食を実現した。また、中学校給食委員生徒による収穫体験学習も行った。



(7) 中学校特別支援学級での農業体験学習

2011年9月～12月の期間、本校農場において、坂戸市立坂戸中学校特別支援学級によるダイコン栽培学習を実施、本校福祉教科との連携で運営した。中学校の給食食材としても提供された。

(8) 小学校1年生の農場探索学習

2011年11月18日、本校農場において実施、本校教員が農場をフィールドとした動植物観察学習を指導した。

(9) 小学校2年生総合学習における野菜栽培学習「収穫祭」

2011年12月20日、本校農場において実施、本校生徒と小学生保護者が、栽培した大根を使ったすいとんを調理し、焚火を囲んで交流会形式の収穫祭を行った。

(10) 小学校5年生の職業体験学習

2012年2月28日、本校農場において実施、職業体験学習として、家畜の管理実習を本校教員が指導した。



3.支援対象校からの声（一部）



太田正久 先生
（前坂戸市立南小学校校長・現坂戸市立坂戸小学校校長）

本校での農業体験研修中の太田先生

小学校における高校の先生や生徒との野菜作り、また、高校農場での農場見学や野外食事・収穫祭など、継続的な連携による体験学習活動は、現代の教育に求められている「生きる力」の育成に大きな効果がありました。

主な成果としては、①子供達が、家畜・農作物・農場内の雑木林・果樹等を直接見たり触ったり、活動をしたりする中で、野菜や自然を身近に感じ、関心が非常に高まった。②専門的な指導者による野菜作りの中で、知恵を学び、育てる喜びや収穫の喜びを実感できた。また、

土や野菜などに触れることへの抵抗感がなくなるとともに、五感が磨かれた。③自分で育てた野菜を、家庭、学校給食・農場での収穫祭で食べることによって、食べる喜びを感じ、食べ物への感謝の気持ちが強くなった。④人間性豊かで専門性の高い高校の先生から指導していただく中で、大人・専門家への憧れの気持ちと、地域の方を身近に感じることができた。⑤一生懸命教えてくれる高校生との交流で、高校生を身近に感じ、異年齢とのかかわり方などを学んだ。⑥人との交流の中で感謝の気持ちが醸成され、来校者や地域の方へのあいさつが自然にできるようになった。⑦心のあたたかい人や土・植物などに触れる中で、心のあたたかさや優しさなどが増した。⑧教職員も豊かな体験活動をしたことで、心や発想が豊かになり、資質の向上につながった。⑨保護者も教育活動の魅力や価値を感じ、学校・家庭・地域が連携した活動が推進でき、学校への信頼度が高まったことなどが挙げられます。

また、今後の課題としては、①高校生・小学生双方にとってより効果的・効率的な交流活動としてのプログラムの改善。②高校側に負っていただくことが多くなっている予算の確保。③担当者の交代等がある中で、プロジェクトの実践と意義を継承して行くことなどが必要になるものと思われます。

4. 今後の展望

プロジェクトでは当初の計画が順調に消化され、提携先の各小中学校からは非常に高い評価を得た。しかし一方で、プロジェクトの内容が多岐に渡ったため、本校としてはやや負担が

大きくなってしまった側面もある。今後は、事業内容の精選と、コンテンツの充実とのバランスを図りながら、プロジェクトの進化に取り組みたいと考えている。